
IN BLOOM2 ~元英雄と普通の学生~

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IN BLOOM ～元英雄と普通の学生～

【Zコード】

Z7563Y

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

彼は「」く普通の高校生だった　異世界に召喚されたという経験を持つこと以外は。異世界で英雄と呼ばれていた少女と、ただの男子高校生の、逆召喚ハートフルラブストーリー。

1・現世への帰還

俺の名前は姫野咲良、あとちょっとで十七歳。異世界に飛ばされた経験がある以外は、極めて普通の男子高校生である。

と、どんなにさらつと言つてみたところで、真ん中に挟んだ言葉のせいで、説得力は極めて皆無だ。異世界に行つたことのある人間は、どんなに主張したところでどう考へても普通ではない。

けれど、それまでは俺は本当にじく平凡な高校生だった。まあ、平凡の基準も人によりけりだらうから補足するなら、性別間違われ率100%の女顔と名前は、非凡と言えばそうかもしない。

でもその他は、成績中の下、部活馬鹿、女の子に興味はあるけど今は恋愛より遊ぶのに忙しいかなっていう感じで高校一年生の終わりを過ごしてた。割と平凡だと思う。

そんな俺だけど、一応好きな人はいた。その中学校から憧れていった先輩が今年高校を卒業するわけで、俺は悪友たちにたきつけられて、卒業式の日先輩に告ることになってしまった。そして見事に振られたというオチ付まで含め、やっぱり割と普通の青春を送つていたと思う。

とにかくここまで、大多数の人人が普通つてことで納得してくれると思うんだ。問題はここからだ。

四年間の片思いが思い出に変わり、俺はその日皆が下校してしまつても、屋上で一人たそがれていた。そうしたら、突然凄い光に包まれて、気がついたら知らない場所にいたのである。ここからが、どう考へてもおかしいところ。

その知らない場所は実は地球でもなくて、「フレンシア」と「ヴァルグランド」という二つの国が数百年に渡る争いを続けている世界だった。フレンシアに落ちた俺は「聖少女」と呼ばれ、兵を率いてヴァルグランドと戦うことを要求されてしまう。だがもちろん、平和な世の中に生きるただの学生の俺にそんなことができるわけが

ない（つていうかそもそも少女じゃないし）。冗談じゃないと逃げ出した俺を助けてくれたのは、皮肉なことに「ヴァルグランドの英雄」だった。でもこの出会いが、俺の全てを変えたんだ。

結論から言えば、俺は無事地球の日本に帰ってきた。けれど、これで普通の日々に帰ってきたかといえば、そうでもない。

異世界に飛ばされた場所と全く同じの学校の屋上に、今俺はある。けれど、俺の目の前には、この世界にいる筈じやない人がいる。

俺を助けてくれた「ヴァルグランドの英雄」エドワード。だけど本当は、英雄として戦う道を選ばざるを得なかつた女の子。俺が絶対にこの手で守りたいと、そう思つ大事な人が。

彼女の手を引いて、俺はとりあえず教室に向かつて進んでいた。すっかり日は暮れてしまつてはいるし、今日は卒業式で授業もなかつたから、校舎に人の気配はない。

もしかして、もう校門が締められてはいるかもしれないから、そしたら窓から出るしかない。けどその前に着替えないと、俺もエドワードも向こうの服のままだ。いくら暗いからといって、コスプレ紛いの格好で一人で歩くのは恥ずかしすぎる。教室に行けば俺のジャージがある筈だ。

実はちょっと浦島状態を懸念していたのだが、教室にはちゃんと俺の名前があった。異世界に呼ばれたのは卒業式の日だから、もし数日でも過ぎてしまえばこの教室に俺の名前はないわけだ。だから、時間は過ぎていらない筈だった。

俺は自分のロッカーからジャージを出すとそれをエドワードに渡し、自分は適当に友達のを拝借することにする。

「えつと、そのままじゃ立つから、とりあえずそれ着てもらつていいかな」

……こんなことなら洗濯しておけばよかつた。体育で使つた日は

洗濯してもらつてゐるけど、三月に入つてから授業もあんまりなくて、掃除でしか着てなかつたから置きっぱなしだつたのである。さすがに異臭はしない……と思うけど、彼女の着替えを待つために廊下に出ようとしたら、突然腕を掴まれてびくつとする。

「な、何？ も、もし俺の服が嫌なら、他の……」

といつても、女子のジャージを勝手に借りたら俺は窃盗犯になつてしまふ。それも変態のレッテル付きで。

「咲良」

どうしようと考えていると、不意に強い調子で名前を呼ばれた。

「な、なに？」

応えると、彼女は困つたようにひきをじつと見た。そして迷うよつに口を開いてまた閉じ、それからよつやく声を上げる。

「……着替えればいいのか？」

「え、う、うん」

だが、勿体をつけた割にはなんてことはない問い合わせ、俺は拍子抜けして頷いた。それを見て、ふつとエドワードは俺から視線を外して腕を離す。

「わかった。少し後ろを向いていてくれ」

「え、いや、外に出てるよ」

彼女がそんなことを言つので、俺は少し慌てて扉に手をかけたが、そうするとまたエドワードが俺を掴む。

「ここにいてくれないか」

そんな言葉に顔が熱くなる。一瞬からかわれているのかと思った。けれどそれにしてはエドワードは思い詰めたような顔をしていて、それは俺をからかう為の演技などではないよつに見えた。それで、顔から熱が引く。

「エドワード？」

腕を掴む手に手を重ねて、そつと呼んでみる。彼女はやはり少し迷つていたが、俺の手に視線をあてて、それからふつと息を吐いた。

「……咲良。君は、私の言葉が解つていてるのだな？」

たけど問い合わせられた言葉が咄嗟に理解できず、俺はさよとんとして彼女を見返すしかなかつた。

「え……どういう意味？」

聞き返す俺に彼女が答えたのは、『じく当たり前の』ことだった。なのに、全く考えもしていなかつたことだつたのだ。

「わからないんだ。私には君が何を言つているのか、わからない

2・悩める家路

俺がむじつの世界で聖少女と呼ばれたのは、実際に聖少女の生ま
れ変わりだからだった。

もちろん、俺も始めはそんなこと信じていなかつたけれど、現に
頭の中で「彼女」の声が響くこと、そして俺が「彼女」と瓜一つの
容姿を持つことで、否定できなくなつてしまつた。

そしてもうひとつ。俺が聖少女の魂を持っているからこそ、言語
の違う世界で意志の疎通ができるのだと。

だとすれば、この世界となんの関わりもないであろうHドワード
が日本語を理解できないのは、考えてみれば当たり前の話だ。

学校は出たものの、俺はこれからどうすればいいのか途方に暮れ
た。けれどもしたところで学生の身である俺には家に帰る以外の道
などない。

でも、家族にHドワードのことを何て話せばいいんだろう。

そんなことを考えてみると、学生カバンの中から携帯の着信音が
聞こえてきた。取り出しつて聞いてみると、画面に出てきた名前は、
「姉」。

咄嗟に切りたい衝動にかられたが、そんなことをすれば余計に俺
の命の保証がない。仕方なく通話ボタンを押すと、聞き慣れた、け
ど懐かしい、だからといって全くありがたくもない、姉の怒声が耳
をつんざく。

『今何時だと思つてんのよ！？』

そして続く音声MAXの罵詈雑言は、予想がついたので既に耳か
ら携帯を離している。それでも充分うるさいけれど。それがひとと
おり収まつてから、俺は改めて携帯を耳に当てた。

「「めん。ひょっと色々あつて……今帰つてるから母さんとやう言

つといて。じゃ」

一息に吐き出してから、間髪入れずに電話を切る。それから俺は改めて携帯の画面を見つめた。三月十六日、午後八時過ぎ。ついでに不在着信が十件ほど入っていて全部姉。

俺が屋上で光に吸い込まれたのはだいたい五時頃だったと思うから、二、三時間くらいの誤差はあるけど、でもその程度だ。時間の流れ方が違うのか、もしくはそもそも全く関係性がないのか。考えたところで答えなんて出ないけど。

それにしても、「色々あつて」の内容が異世界云々だなんて、姉も母も考へてもいないうな。考へていたら天才 というよりある意味病気だ。ため息をつきながら携帯をジャージのポケットに突っ込むと、そこで初めてエドワードが怪訝そうにこちらを凝視しているのに気がついた。

「ああ、まあ、そりやそつか。彼女は携帯なんか知らないわけだし。「あ、ええとこれは携帯電話つつつて……、つて、言葉、わかんないんだよな」

取り出しかけた携帯を、もう一度俺は突っ込んだ。

もどかしい。

知らない世界で、知らないものばかりで不安だらうに、言葉までわからないなんて。不安を少しでも軽くしたいのに、その方法すらわからないなんて。

そんな、全く違う、何もわからない世界に、彼女を連れてきてしまったなんて。

「……ごめん……」

結局零れたのはそんな言葉だった。

謝ったところでどうしようもない。もう取り返しがつかないし、それ以前に、これが謝罪だつてことも彼女には分からなんだ。

「それは、謝罪の言葉か？」

なのに、エドワードがそんなことを口にして、俺は驚いて顔を上げた。薄暗くてよくわからないけど、苦笑する彼女に不安そうな色

はなく、いつもと同じように見える。

「当たりだろ？ まったく、君は解りやすくて助かる。……せめて、私の言葉だけでも君に届いて良かつた」

「どんだけ顔に出やすいんだ、俺……。

でも、全く意志の疎通ができないわけじゃないって分かつて少しはほつとした。Hドワードはやっぱり凄い。知らない世界に来ても俺と違つてうるたえたりしていなしし、困つてばかりの俺よりよっぽど堂々としてる。さすが英雄と言われていただけのことはある。

それに比べて、俺のなんと頼りないことか。今はもう、異世界だからという言い訳も通じない。

一瞬自己嫌悪しかけたけれど、繋いだ手がぎゅっと握られて我に帰つた。

「詫びないでくれ、咲良。私はヴァルグランドを出たことがないから、ただでさえ世間知らずで驚くことばかりだが、でもそれが楽しい。全く不安でないといえば嘘だらうが、私は大丈夫だ。君を信じているから」

優しく微笑むHドワードの言葉が、胸に直接響いてくる。

ああ、俺、アホだ。いくらエドワードが強くても、いくら俺が頼りなくても、それでも来たばかりのこの世界じゃ彼女は俺しか頼れないのに。

ぎゅっとHドワードの手を握り返す。弱気になつていや、守るなんできやしない。彼女を守るつて誓つたばかりなのに、早速破るといひだつた。

「……行こう」

言葉はわからないかもしだれいけど、何も言わないよりずっとマシな筈だ。できるだけ笑顔で、できるだけ不安にならないように優しく、そう声をかけるとHドワードは微笑んで返事をしてくれた。

3・波乱の帰宅

かくして、俺は久々に自分の家に帰ってきた。

家族からしてみれば帰りがいつもより遅い程度だろうが、俺的には数ヶ月ぶりだ。向こうに行ってる間、ホームシックになったことはなかつたが、こぞ帰つてみるとなんだかすこく落ちついて、目の奥がジンとした。

とか、感傷に浸つている場合じゃなくて。

ちらりとエドワードを振り返る。

俺にはまだ、彼女を養い守つて行くだけの力はない。だから、今は親に頭を下げるしかない。せめて俺が大人になるまで、ここにエドワードを置いて欲しいって頼まないと。

「もしかして、咲良の家？」

「そうだよ」

頷いてから、俺は彼女の手を引いた。だがソックローでその歩みは阻まれた。俺の前に飛び出してきた、茶色のふさふさ。

そいつはワンワンと嬉しげに声をあげて、俺の足元で尻尾を振る。

「ああ……シホウ。俺今忙しいから」

飼い犬のシホウである。メスの柴犬で六歳。由来は合氣技から。変な名前と周囲に散々言われるが、コキュウナゲとかイッキョウとかよりは呼びやすくてカツコイイと思う。

久々にシホウと戯れたい衝動はあるが、それはひとまず後だ。そう思つてシホウの隣を行き過ぎるが、その瞬間に握つっていた手がするりと離れた。

振り返ると、エドワードが……シホウと思い切り戯れていた。

「咲良！ こいつ凄く可愛い！！」

かがんだエドワードに、シホウが飛びついて顔をペロペロ舐めている。エドワードはそれをまったく嫌がらず、シホウにされるがままになりながら夢中で頭を撫でくりまわして大変上機嫌である。そ

れで俺は思いだした。

エドワードは、可愛いもの好きなんだよな。

後にしてくれといふ言葉を飲み込んで、エドワードを急かすのをやめる。笑い声を上げながら楽しそうにシホウと遊んでいるエドワードを見て、俺はシホウに心底感謝した。良かった。エドワードが辛そうじやなくて。悲しそうじやなくて。できれば、この笑顔を、俺があげられるといいんだけど。

いや、できる筈だ。エドワードの中では、俺もシホウもきっと大差ない筈だ！

俺が積極的なのか消極的なのかわからない妙な確信を得た瞬間、玄関の扉ががらりと開いて俺の肩がびくりと跳ねる。

「何してんの！ 帰ってきたならシホウと遊んでないでとっと入りー

活動的なショートカット、Tシャツにショーパンに健康サンダルをつっかけて、玄関を開けるなり俺を怒鳴りつけてくるのは言つまでもなく 異世界に行つてもまったくこれっぽっちも恋しくならなかつた俺の姉、姫野楓かえでだ。

だが姉はシホウと戯れるエドワードを見た瞬間言葉を切つた。そして、エドワードが振り向く前に一度扉が閉まる。十秒たたずにまた扉が開いて、だがそこに現れた姉ちゃんはさつきと微妙に違つていた。髪をピンで留め、グロスを塗り直し、一ハイにパンプスを合わせている。

「やだ、咲良。友達といふならなんでもさつきってくれなかつたのあー

声のトーンが確実に一オクターブは上がり、俺は全身に鳥肌が立つた。相変わらず外面だけはいい。というかこっちが素の姉ちゃんで、俺にだけピンポイントで優しくないと言つた方が正しいかもしない。

それはともかく、極上スマイルでエドワードを見る姉ちゃんは、何かとっても誤解している気がした。そんなところに、とっても誤

解した母さんの声が割って入る。

「あら……咲良つてばこんなイケメンな友達がいたのね～」
やつぱり誤解している。

Hドワードはイケメンではない。だけどそれ以上に、Hドワードについては色々話さなければならないことがある。

「咲良、友達と遊ぶのもいいけど、遅くなるなら連絡くらい……」

母さんの小言が耳をすり抜けていく。

なんて言えばいいんだろう。その最初の一言を、俺はずつと探っていた。

でも結局浮かばなかつた。親が納得するようなうまい理由も。Hドワードが何者なのかを上手く誤魔化すような都合のいい言葉も。ただでさえ嘘が苦手で口べたな俺に、そんなこと最初から無理だつたんだ。

それに思い当つたとき、俺は無意識に膝をついて、地面を頭につけていた。もう母さんや姉ちゃんの顔は見えないけれど、ぎょっとしているであろうことは想像に難くない。

「母さん、お願ひします！ 何も言わずHドワードをこの家に置いて下さい！」

さすがにその一言では片付かなかつた。

とにかく入れと言われて、俺は立ち上がりとHドワードを連れて数ヶ月ぶりに我が家敷居をまたいだ。

ダイニングには三人分の夕食の準備が整つていたけれど、そちらではなく母さんはリビングに座り、テレビのスイッチを消す。

「で？」

一言で説明を求められて、俺は母さんの正面に正座すると、放課後から今までの出来事をかいづまんで説明した。

ただでさえ説明が下手だから、全くの意味不明になつたと思つ。

屋上にいたらいきなり違う世界になつて、そこでエドワードに助けられて、それで俺は今度は逆に彼女を助けたくて。

そして彼女を連れて帰ってきたのだ と。

案の定、姉ちゃんは「何言つてゐるの『トイツ』」といつて俺を見下ろしてきたが、母さんは特に表情を動かさなかつた。話し終わつた俺をしばらくじっと見つめ、それからエドワードに視線を移す。

「……咲良の言つてることは、本当？」

けれど、エドワードにはこいつちの言葉がわからない。俺が何を説明してたのかだつてわからない筈だ。困つたよつてエドワードは視線を落とし、それから彼女が声を発した相手は俺だった。

「『』の方達は、咲良の母上と姉上……で、会つてゐるか？」

「うん、そうだよ」

まあ母上だと姉上だとがいう大層な人たちじゃないけど。エドワードの問いかけに頷くと、立つたままだつた彼女は跪いて、それから俺を見て正座し直して、頭を下げた。

「私には貴方達の言葉が解らないのです。こちらの礼儀も知らず、どうか非礼をお赦し下さい」

エドワードの言葉を聞いて、俺を変人でも見るよつて見下ろしていた姉ちゃんが、驚いたよつてエドワードを見て自分も座つた。

「えつ、何語??」

やつぱりそうか。エドワードがこいつらの言葉を理解できなつてことは、エドワードが話している言葉もこいつらの人には通じないんだ。

「えつと……、エドワードはこいつらの言葉が解らないんだ。礼儀も知らないで、『』めんなさいって」

簡単に通訳すると、母さんは疲れたようなため息を吐いた。

「……困つたわ

「え?」

「適当なこと言つなつて言いたいのに、あなたが嘘をつけなつて

「」と誰よりも知ってるから、困ってるの「

」そう言つて、もう一度深いため息をついて母さんが、なんだか急に歳を取つて見えてしまった。

「つむは全員童顔傾向にあって、母さんも実際の歳よりずいぶん若く見える。姉ちゃんと姉妹に見られることもよくあるくらいだ。おまけに、ウエーブのかかった茶髪をまとめたシコシコも花柄のエプロンも、およそ三十代の主婦がつけるのはどうよといつ代物で落ちつきのない母だから、こんな風に思い詰めたような、疲れたような母さんを見るのは初めてだった。

「とにかく」飯にしましょう。今取り分けるから、あなたも食べなさいな」

ハドワードに向けてそう声をかけ、母さんは立上がりと、戸棚から客用の茶碗を出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7563y/>

IN BLOOM2 ~元英雄と普通の学生~

2011年11月23日09時45分発行